

日本英文学会東北支部 第79回大会資料

共催：国立大学法人 弘前大学

時：2024年11月30日（土）

所：弘前大学文京町キャンパス

（青森県弘前市文京町1番地）

日本英文学会東北支部事務局

〒960-1296 福島市金谷川1番地

福島大学 人間発達文化学類 高田英和研究室内

電話：024-548-8156／E-mail：tohoku@elsj.org

第 79 回大会懇親会のご案内

第 79 回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みにつきましては、10 月に支部
会員宛に別送する案内をご覧ください。

【日時】 2024 年 11 月 30 日（土）午後 6 時～8 時

【場所】 弘前れんが倉庫美術館 cafe & shop BRICK（青森県弘前市吉野町 2-11）

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2024 年度 大会役員一覧

（敬称略）

支 部 長	福士 航				
副 支 部 長	大貫 隆史				
理 事	井出 達郎	大河内 昌	大西 洋一		
	大貫 隆史	木村 宣美	三枝 和彦		
	境野 直樹	島 越郎	高田 英和		
	竹森 徹士	福士 航			（五十音順）
大会準備委員	相田 明子	泉 順子	山口 晋平		
	堤 博一	戸塚 将			
開催校委員	堀 智弘				
事務局	高田 英和（事務局長）	川崎 和基（事務局長補佐）			
	佐藤 元樹（事務局員）				

日本英文学会東北支部第79回大会プログラム

共催：国立大学法人 弘前大学

時：2024年11月30日（土）

所：弘前大学文京町キャンパス・総合教育棟
（青森県弘前市文京町1番地）

理事会 11時00分より（205教室）

開会式 12時30分より（206教室）

- 開会の辞 日本英文学会東北支部長 福 士 航
- 東北英文学賞（奨励賞）授賞式
受賞者 英文学分野 飯味 千秋（東北大学大学院）

研究発表

第1発表 13:00 - 13:30 第2発表 13:30 - 14:00
第3発表 14:00 - 14:30

英米文学部門（206教室）

1. 【発表なし】

司会 東北学院大学教授 泉 順子

2. アリ・スミスの『春』における他者——対話について

岩手大学講師 中 谷 紘子

司会 弘前大学准教授 土 屋 陽子

3. 「日本」とはなにか：観光産業からみるアラン・ブース

Japan: Land of Many Faces における「日本」表象

八戸工業高等専門学校准教授 菊 池 秋 夫

英語学部門 (207 教室)

- | | | |
|-------------------------------|-------------|------|
| | 司会 弘前大学助教 | 齋藤章吾 |
| 1. 一致に基づくボックス理論 | | |
| | 東北大学大学院 | 熊谷陽希 |
| 2. 従属節の stripping とその類似現象について | | |
| | 福島大学准教授 | 佐藤元樹 |
| <hr/> | | |
| | 司会 都留文科大学講師 | 堤博一 |
| 3. 非名詞句主語の意味と一致の相関について | | |
| | 福井大学講師 | 廣川貴朗 |

SYMPOSIA (14:45 – 17:00)

英米文学部門 (206 教室)

児童文学と汎用性

- | | | |
|-------|---------------|------|
| 司会・講師 | 仙台青葉学院短期大学准教授 | 相田明子 |
| 講師 | 宮城学院女子大学助教 | 山口晋平 |
| 講師 | 島根大学講師 | 宮澤文雄 |
| 講師 | 山形大学准教授 | 三枝和彦 |

英語学部門 (207 教室)

構文研究から理論研究への貢献についての再考

- | | | |
|-------|-----------|------|
| 司会・講師 | 宮城教育大学准教授 | 戸塚将 |
| 講師 | 弘前大学助教 | 中島崇法 |
| 講師 | 東北大学大学院 | 柳澤國雄 |
| 講師 | 東北大学大学院 | 平塚哲郎 |

研 究 発 表

英米文学部門

司会 東北学院大学教授 泉 順 子

アリ・スミスの『春』における他者——対話について

岩手大学講師 中 谷 紘 子

アリ・スミス(1962—)の小説『春』(2019)は、EU 離脱後の英国を描く四季四部作の三作品目であり、移民に関する問題が主に取り上げられている。小説には2人の視点人物がおかれ、老演出家のリチャードと、移民収容施設で働くブリジットの物語が、謎の少女フローレンスの出現によって交錯するものとなっている。スミスの小説の面白さのひとつに、登場人物たちの間で交わされるエッジとウィットの効いた(に富んだ)会話のやり取りがあり、それが実に軽やかに進むことで全体的に後味の軽い作品に仕上がる傾向がある。本作品にも登場人物たちのウィットに富んだ会話の切返しがあり、作者のことばの感覚に対して感嘆の声をあげそうになるのはもちろんだが、バフチンのダイアログ論を手がかりにそのコミュニケーションを照射すると、社会の分断と統合という小説のテーマ、及びその動きがはっきりする。そこで本発表では、小説内に提示された他者の概念を、言語意識を以って考えてみたい。

司会 弘前大学准教授 土 屋 陽 子

「日本」とはなにか：観光産業からみるアラン・ブース

Japan: Land of Many Faces における「日本」表象

八戸工業高等専門学校准教授 菊 池 秋 夫

「日本論・日本人論」は、日本が第二次次大戦後に経済成長を遂げた 1970 年代から 1980 年代に流行したトピックである。そうした議論の中で、アラン・ブース (Alan Booth, 1946-93) は、決して十分な検証がなされてきたとは言い難い。彼は、1970 年に来日以降、日本で生活するだけでなく、各地を徒歩で周り、非常にマイクロでヴィヴィッドな視点から日本や日本人について言及しているのが特徴である。彼が書いた日本に関するガイドブック *Japan: Land of Many Faces* (1985) は、わずかなブース研究の中でも、*The Roads to Sata* (1986) や *Looking for the Lost* (1993) よりも、注目をほぼ受けてこなかったと言っても過言ではない。しかしながら、*Japan: Land of Many Faces* には、代表作となる他の 2 作に共通する部分があるほか、より包括的な日本論になっている点で再考の余地があるように思われる。

日本の観光産業は、戦後において大きく発展していくが、そのなかで 1970 年代・1980 年代が一つの頂点である点においては、疑う余地はほぼないと言ってよいだろう。こうした観光産業において、地域表象の大きなモチーフの一つとなったのが、「ふるさと」のイメージであることは疑いを得ない。そうした「ふるさと」イメージ

形成において、外国人であるアラン・ブースが果たした役割は看過することは難しいだろう。本研究では、ブースの *Japan: Land of Many Faces* を、当時の観光産業における日本表象の文脈から、「日本」がもつイメージの特殊性を検討していきたい。

英語学部門

司会 弘前大学助教 齋藤章吾

一致に基づくボックス理論

東北大学大学院 熊谷陽希

Chomsky (to appear)は発音位置と解釈位置のずれを説明するために、フェーズ先端へ内的併合した要素が上位のフェーズで解釈されるボックス理論を提示した。しかし一見すると内的併合をしていないにもかかわらず発音位置と解釈位置のずれを示す問い返し疑問文 *Mary saw what?* のような現象がある。本発表は、Chomsky (to appear)によるボックス理論を修正し、ボックス化されるのは、[uF]をもった要素が派生に導入されたフェーズ内で一致によって[uF]の値を付与されない時であると提案する。このようにしてボックス化された要素はボックス化された位置に加えて上位フェーズでアクセスされる位置での発音・意味解釈が可能であるとする。これによって、問い返し疑問文のような発音位置と解釈位置のずれについても通常の疑問文と統一的に説明できることを示す。

従属節の stripping とその類似現象について

福島大学准教授 佐藤元樹

本発表では、従属節内で stripping が許される文脈とその統語派生について論じる。従来、stripping は従属節では適用できないと考えられていたが、英語のような言語では、(i) 非叙実的述語の補文であり、(ii) 補文標識 (that) が非顕在的である、という二つの条件を満たしている場合、従属節の stripping が許されることが判明している。しかし、この条件に従わず、補文標識が顕在的な副詞節内において stripping が許されることも観察されている (Myer and Yoshida 2018, Overfelt 2018)。本発表では、新たに、譲歩を表す whether 節内においても stripping に相当する省略現象があることを示し、幅広い副詞節で stripping が適用可能であることを示す。また、従属節の stripping には、繫辞文派生と非繫辞文派生の二通りの基底構造があることを論じる。

非名詞句主語の意味と一致の相関について

福井大学講師 廣 川 貴 朗

英語には、一見すると名詞句ではない主語（非名詞句主語）が生起し、動詞と一致を示すことが知られている。

That the march should go ahead and that it should be cancelled have been argued by the same people at different times (McCloskey (1991: 564))

先行研究においては、非名詞句主語の意味と単数・複数一致との間に相関があることが指摘される一方で、非名詞句主語の範疇によって単数・複数一致の可否が異なるとも指摘されている。本発表は、等位接続された非名詞句主語が範疇の別に拘らず単数・複数一致を起こすこと、等位接続された非名詞句主語の一致には意味的な側面が影響することを示し、単数・複数一致を示す様々な非名詞句主語に共通してみられる意味的な性質を指摘する。

SYMPOSIA

英米文学部門

児童文学と汎用性

司会・講師	仙台青葉学院短期大学准教授	相田明子
講師	宮城学院女子大学助教	山口晋平
講師	島根大学講師	宮澤文雄
講師	山形大学准教授	三枝和彦

児童文学の成立は17世紀後半、ヨーロッパの社会で「子ども」の存在が認識され尊重され始めた時期とされる。例えば、ペローの『童話集』(1697)は、翻訳されヨーロッパの国々に流布し、19世紀になるとグリム兄弟によって語り直された。その『グリム童話』(1812)もまた、翻訳や出版を経て、様々な国の子どもたちに届けられた。20世紀になるとディズニーの映像化によって、フェアリーテイルの魔法は、子どもばかりでなく大人をも魅了するようになった。多くの神話や民話、伝説物語などが、同様の過程を経て、21世紀となった現在は、インターネットを通じ、テキストや映像となって瞬時に届けられている。このように、何世紀もの間、幾度も再話され、循環しながら、人々に浸透してきたことこそが、児童文学の魅力のひとつではないだろうか。本シンポジウムでは、こういった児童文学の汎用性に着目し、循環するテキスト、再話されるテキストにおける、同時代的な理解や社会的用途の変遷をとらえ、21世紀にも尚効力を発するファンタジーについて再考したい。

子供と大人の境界線を越える

——ナサニエル・ホーソーンの *A Wonder Book* における脱構築的試み

山口 晋平

「児童文学」という言葉を用いる時、私たちは無意識に大人向けの作品と子供向けの作品という二元論に陥っている。そして子供のために作られた作品というラベリングは想定される読者から大人を排除し、大人側も自身の選択肢から作品を取り除いてしまう可能性を秘めている。本発表はそのような児童文学の持つ境界線に注目しながら、ナサニエル・ホーソーンの子供文学作品の代表である *A Wonder Book* (1851)における子供と大人というテーマについての解釈を進めることを出発点として、両者の二項対立の解消を試みたい。本作品は18歳の青年ユースタスがギリシア神話の物語を改変して子供たちに6篇語るというフレームナラティブの構成を取っている。各物語の前後にユースタスと子供たちの会話が挿入され、児童文学を語ることの意義をメタフィクショナルに表現しているようにも解釈できる。この作品を通してユースタスと子供たちが神話の語り直しをきっかけに大人と子供の境界線を越える様を論証し、児童文学を語ることの新しい可能性を模索していきたい。

災害児童文学の想像力とラフカディオ・ハーン

宮澤 文雄

東日本大震災以降、災害に対する社会的な関心の高まりとともに、災害を描いた過去の文学作品が見直されるようになる。そのひとつにラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の“A Living God” (1896)がある。これは、地震津波から村人の命を救った男が生神になったという話を例に、日本人の民俗神道のあり方を語った作品である。本作は、ハーンの死後、小学校の教員によって翻訳・再話され、国語教科書の教材となる。一度教科書から消えたのち、半世紀を経て、今度は地震学者の筆によって被災した男と村人たちの後日譚として再登場する。この“A Living God”の教材化は、小学校教育を通じた一種の児童文学化の過程でもある。本発表では、この児童文学化の過程で作品と教材の間に生まれた距離をヒントに、災害を題材とした日米の児童文学作品を取り上げ、それらと“A Living God”との距離の検討を通じて、災害児童文学の想像力というものを捉えてみたい。

令和の中学校英語教科書における児童文学教材

三枝 和彦

学校教育で使用される英語教科書は、日本人が英語文学に出会う場となってきた。読書がますます稀な行為になっている昨今、教科書が果たすそのような役割はいつそう貴重なものになっていると言えよう。一方で、昭和、平成を通して、日本の英語教育において英語文学は重みを失ってきた。教科書に掲載されてはいるものの、口頭でのやり取りと実用的な英語を重視するカリキュラムの中で、その分量や取り扱いが軽くなっている。それでは、令和の英語教科書で英語文学はどのように教材化されているだろうか。本報告では、令和3年度から全面実施された『中学校学習指導要領（平成29年告示）』に基づき編集された英語教科書の英語文学教材を分析する。特に、『アリス』や『ピーター・ラビット』など、繰り返し教科書に登場する児童文学作品に注目し、原作への橋渡しとしての教材の役割についても考察したい。

変容するフェアリーテイル

相田 明子

アンジェラ・カーターの“Ashputtle or The Mother’s Ghost: Three Versions in One Story” (1993)は、タイトルが示すように「シンデレラ」のアダプテーション3部作である。読者は、予め、登場人物やプロットが、先行する幾つかのシンデレラのイメージを維持していることを認識しながら、再話の世界に入っていく。さらに、このときすでに*The Bloody Chamber* (1979)に精通している読者は、フェアリーテイルのシンボリズムと癒しの魔法が、ヒロインに受動的で純真であることを強制してきたことも、魔法の鏡は欲望の投影であることも知っている。本発表では、ポストモダンのフェアリーテイルにおけるアダプテーションの用途について考えてみたい。

構文研究から理論研究への貢献についての再考

司会・講師	宮城教育大学准教授	戸塚 将
講師	弘前大学助教	中島 崇法
講師	東北大学大学院	柳澤 國雄
講師	東北大学大学院	平塚 哲郎

本シンポジウムでは、様々な構文研究から生成文法理論の進展にどのような貢献ができるかということを中心に議論を展開していく。生成文法理論の研究にとって構文研究は、理論を進める上で重要な役割を果たしてきた。しかし、近年の生成文法理論は理論的に抽象度が高くなっており、理論研究は理論研究、構文研究は構文研究としてお互いの乖離が見られる傾向がある。もちろん、この点を意識した優れた研究はあるが、今一度生成文法理論における構文研究の重要性を再考する機会を持てればと思う。

戸塚は構文研究と理論の進展との関係の概説を行い、各講師の発表へと繋げる。中島は外置構文の構文研究から現在の極小主義における付加操作の位置付けを考察する。柳澤は *that* 痕跡効果の構文研究から統語演算と音韻・韻律的制約との関係を考察する。平塚は *Andrews Amalgam* の構文研究からこの構文に見られる統語的特性を明らかにし、現行の理論でどのように扱えるかを考察する。最後にフロアを含めて全体でこれらの構文研究が生成文法理論にどのように貢献するかを議論したいと思う。

生成文法における構文研究

戸塚 将

本発表は、生成文法における構文研究という点から、これまでの理論変遷とその理論の転換に重要であった構文研究との関係について見ていく。生成文法理論は、初期の理論から現在の極小主義理論に至るまでに何度かの理論の転換が見られる。これらの転換の度に理論内での仮説や道具立てが変わっていったが、これらの進展の背後には様々な言語現象の発見、分析があった。これらの言語現象はいわゆる構文と呼ばれたりもし、理論の転換が起こるとその理論に合わせた再分析がされてきたりもした。構文研究をまとめたものとしては国内であれば中村・金子 (2002) や中島 (2001) など、国外であれば *Everaert and van Riemsdijk (2006/2017)* などが挙げられる。構文研究自体の重要性は昔も今も変わらないはずであるが、理論の抽象度が高まるにつれ構文研究自体の立ち位置も難しくなっているかも知れないのが現状である。この現状に対して考える契機を提供できればと思う。

生成統辞論において、転置要素の派生に用いられる操作は指定部への代入 (substitution) と、最大投射への付加 (adjunction) の二種類に大別される。前者の操作の代表例が *wh* 移動であり、極小主義統辞論では指定部への内的併合として扱われる。一方付加操作は話題化、数量詞繰り上げ、外置、重名詞句移動などのさまざまな言語現象を捉えるために用いられているものの、極小主義理論における位置づけは必ずしも明らかでない。

本発表では、文の構造構築に併合のみを仮定する枠組みの中で付加操作をどのように位置づけることができるかを、名詞句からの外置 (extraposition from NP) 構文を例にとり論じる。また本発表では当該構文にみられる局所性制約を、フェイズ理論に基づくコピー形成の観点から説明する。

主語抜き出しの不可能性とその回復効果

柳澤 國雄

補文標識 *that* と補文主語のコピーが続く配置があると非文になる現象である *that* 痕跡効果は、一般的な原理によって説明する試みが従来から行われている。

近年のラベル付けアルゴリズムを用いた Chomsky (2015) の分析では、主語抜き出しが不可能である *that* 痕跡効果はラベル付けのために主語が TP 指定部に留まらなければならないとする弱主要部 T の制約から導出される。しかし、この分析は *that* 痕跡効果が回復する様々な例を捉えることができない。

一方、音韻・韻律理論に基づく分析 (Kandybowicz (2006), Sato and Dobashi (2016)) では、*that* と隣接する主語のコピーとの間の音韻・韻律的な要件を提案することで *that* 痕跡効果とその回復効果を分析している。これらは *that* 痕跡効果以外で見られる主語抜き出しの不可能性を説明することができないだけでなく、*that* 痕跡効果と同様の回復効果がある場合においても観察される事実もまた予測することができない。

本発表では、韻律境界の左端に顕在的な要素を求める音韻・韻律的制約 (An (2007)) が主語位置に課されることを提案し、この制約が満たされない場合に *that* 痕跡効果を含む主語抜き出しの非文法性が生じると論じる。また、この制約が他の顕在的な要素によって満たされる場合や、制約自体が課されない場合に回復効果が見られると分析する。

○大会会場（弘前大学文京町キャンパス）へのアクセス



○JR 弘前駅から

- ・徒歩の場合（約 20 分）
- ・タクシーを利用する場合（約 5 分）
- ・バスを利用する場合（約 15 分）

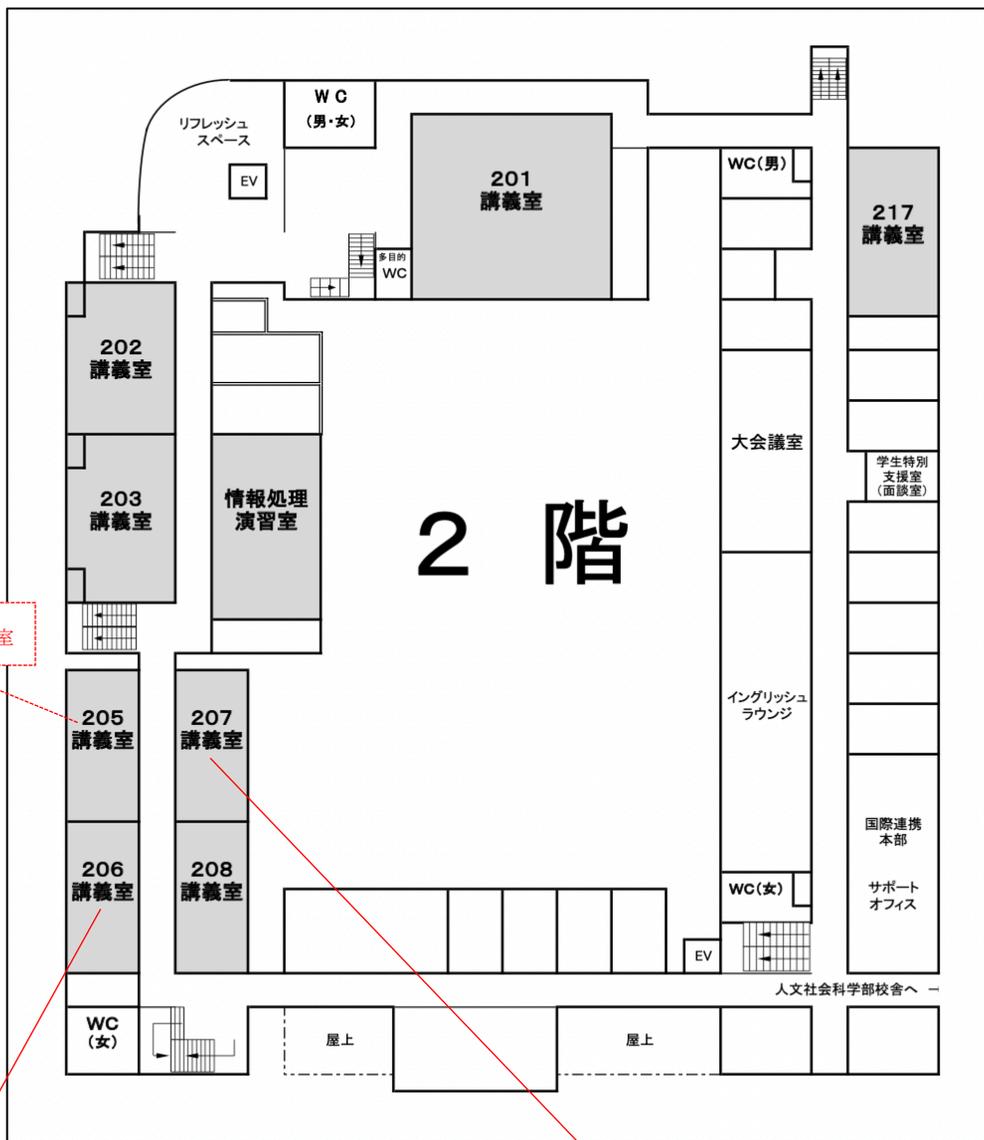
JR 弘前駅前（中央口）【3 番のりば】

「小栗山・狼森線」または「学園町線」に乗車、【弘前大学前】で下車



キャンパス・マップ

○施設平面図（総合教育棟 2階）



理事会・会員控室

開会式・英米文学部門（研究発表・シンポジウム）

英語学部門（研究発表・シンポジウム）